

「国際協力教育」と学士力養成

——「旅育」の視点から——

中嶋真美

要 約

本研究では「国際協力教育 (ICS: International Cooperation Studies)」の実施による学士力養成の可能性について「旅育」の視点を用いた検証・考察を行った。大学等の高等教育機関で実施する海外での課外活動としてICSを捉えた場合,その成果に対しては社会的要請だけでなく,学生の期待感も高く,教科を通じた学士力養成のニーズは大きい。本稿では,ICSの軸ともなる海外研修プログラムの素案を提示し,どのようなプロセスで学士力養成に貢献しうるのかについて考察を加えた。その結果,ICSの研修プログラムへの参加,すなわち旅への参加は,文科省の提示する「学士力」に示される能力や姿勢形成に効果的であり,ICSが旅育手法として有効に機能する可能性が高いことが明らかとなった。

キーワード：学士力, 旅育, 国際協力教育

1 はじめに

近年,大学の教育の質・レベル,学生の卒業時の質や能力といった学習成果の明確化が求められている。文部科学省中央教育審議会大学分科会制度・教育部会の学士課程教育のあり方に関する小委員会は,平成20年にその審議のまとめ「学士課程教育の再構築に向けて」で「学士力」を提言し,大学卒業時に身につけるべき力量について明らかにしている。同様に経済産業省からは「社会人基礎力」,厚生労働省からは「YES—プログラム」などといった就職基礎力をはかる内容の試みも実施されている。いずれも卒業時にどのような学生を送り出せるのかという質保証,出口保証に関わるものであり,各大学の教育力が試されているとも言える。平成20年の教育振興基本計画特別部会が示した「教育振興基本計画の在り方について——「大学教育の転換と革新」を可能とするために」では,2025年に向けての大学教育の展望として「質保証の体制」のためには「多様な大学教育の「質の尺度」を開発し,大学評価を強化する」ことが挙げられている。このような背景を受け,現在,各大学では教育内容,教育環境,教育効果について検討を進めている段階にある。

文部科学省により「学士力」の概念が提示されたこと自体が平成20年（2008年）であることから、学術的な研究成果の蓄積は現在進行中ではあるが、その成果に対する期待感が高く、各教育・研究機関での取り組みが盛んに行われている。結果的に、高等教育政策、学士力の測定やラーニング・アウトカムの視点からは川島（2008）や飯吉（2009）、矢藤（2009）、松村（2009）らが研究を重ねており、また各大学の取り組みや評価の観点からは、川口ら（2009）、久世ら（2009）、小川ら（2009）などが研究成果を示すなど、各大学の取り組みの深さがうかがえる。しかしながら各教科の実質的な効果については、当然ながら各科目独自の性質やねらいなどが存在するため一般化することが難しいのも事実である。

本研究では、昨今の高等教育への期待感の高まりに対するより具体的な提言として、「国際協力教育¹⁾」の実施による学士力養成の可能性について、「旅育」の視点をを用いて検討することを目的とした。「旅²⁾」には様々な効用があると言われているが、高等教育機関で実施する海外での課外活動を仮定した場合、殊に学士力養成の観点からすれば、どのような効果、あるいは各能力の獲得可能性が見込めるのかについて検証を試みた。学士力養成については、主として文部科学省答申にある「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」を参考にし、項目別の検証を行った。なお、本研究は平成22年度共同研究の成果をベースとした継続研究の位置づけにあるものとし、主な研究手法は文献研究および質問票を用いた調査結果データの分析によるものとする。

2 大学の教育力と学士力

2.1. 大学の教育力——出口保証と教育手法

文部科学省のデータによれば、平成22年度の大学・短大等への現役進学率は、7年連続の上昇で過去最高の54.4%となった。こうした状況、すなわち、いわゆる「全入時代」に近い状態は、高等教育の「ユニバーサル・アクセス」段階にあり、ひとたび中等教育を終えた人々や学びの場から離れた社会人などが再度高等教育機関において高等教育を受ける機会を享受しやすくなるという意味で、平等な教育機会の保障がなされることにもなる、という見方は以前から言われてきたことである（トロウ, 1976）。その一方で、従来にはなかった問題点も指摘できる。矢藤（2009）らによれば、「誰もがアクセスできるという状況は学ぶ意思を持つもののみならず、さほど目的意識がなかったり、高等教育機関での学修に不可欠な基礎学力そのものに困難を抱える者にとっても、高等教育に触れる機会を得られるということでもある。（中略）「全入」に近い状況の下では、これまでのような入口管理が機能する前提が喪失し、その結果、これまでと同様の教育内容・方法で対応するのみでは、当該大学の提供する高等教育の質も担保することが著しく困難とならざるを得ない」と指摘している。こうした状況の中、多様化する入学への卒業時の質保証の問題は、卒業時の一定の成果が求められる現代においては大学の価値を

左右する要素でもあり、大学側が取り組むべき喫緊の課題であるとも言える。

こうした背景から、近年の高等教育機関ではこうした質保証、出口保証の方策を試行錯誤している。卒業時にどのような能力を備えている必要があるのか。その基準の一つとなるものが「学士力」と呼ばれるものである。

2.2. 学士力養成——求められる力

平成20年12月、中央教育審議会は「学士課程教育の構築が我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識に立」ち、以下のような4つの問題意識の上に審議重ね、「学士課程教育の構築に向けて（答申）」を発表した。

第一に、グローバルな知識基盤社会、学習社会において、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、より良いものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会からの信頼に答えていく必要がある。第二に、高等教育のグローバル化が進む中、学習成果を重視する国際的な流れを踏まえつつ、我が国の学士の水準の維持・向上のため、教育の中身の充実を図っていく必要がある。第三に、少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の入口では、いわゆる大学全入時代すうせいを迎え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方、出口では、経済社会から、職業人としての基礎能力の育成、さらには創造的な人材の育成が強く要請されている。第四に、教育の質の維持・向上を図る観点から、大学間の協同が必要となっている。

（文部科学省「学士課程教育の再構築に向けて（答申）」より）

また、「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」として、以下のような内容を提示している³⁾。

- ①知識・理解
- ②汎用的技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）
- ③態度・志向性（自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力）
- ④統合的な学習経験と創造的思考力

こうした指針に基づき、各大学は学士課程教育を終える時期（卒業時）に、上記の項目でいう④統合的な学習経験と創造的思考力、すなわち、「これまでに獲得した知識・技能・態度などを総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力」

を身につけられるよう配慮されたカリキュラムおよびプログラムの形成を行っている。小原(2006)によれば、「学生として大学で学んだことと社会に出てから就く職業との不一致が恒常的に起こるようになりました。(中略)自分の学んだ専攻分野と関係する仕事に就ける機会がたいへん少なくなっているのが今の時代」とし、その上で「大学に必要なことは、どのような時代や社会であっても対応することのできる能力を学生に身につけてもらい、社会に送り出すこと」であると述べている。また先述の答申にもある通り、社会が緊密に結びつき、グローバル化した社会や高度知識社会への対応ができる人材の需要は年々高まっており、個人の幸福と社会の発展のためには「21世紀型市民」の育成が強く望まれている。

3 旅育とは何か——観光と教育

観光と教育の関係には2つの種類が考えられる。一つは「観光のための教育」(観光を教える)であり、もう一つは「教育のための観光」(観光で教える)である。本研究で取り扱う範囲は、この後者にあたる。

「教育のための観光」は、教育観光 (educational tourism) と呼ばれ、観光が持つ様々な教育的意義に着目して、教育を行うことである(宍戸, 2007)。また、安村(2007)によれば、「教育のための観光」は、旅に内在する教育的意味を観光に反映させて、その観光を活用する教育と言える。旅には、一般的に認識されているように、自らの社会や文化を一旦離れ、苦勞して他の社会や文化を観ることが個人の人間形成に役立つという教育的意味がある」のである。そのような観点から、教育観光は観光体験を通して、観光者が教養や知識の獲得、自己啓発等を果たし、人間的成長を遂げることを目的としているものと位置づけることができる。代表的な教育観光は、いわゆるグランド・ツアー (grand tour)⁴⁾ や修学旅行が挙げられるが、近年では、学校教育課程で実施されるだけでなく、広く地域社会で取り組まれるケースも見られる。社会貢献活動への参加や生涯学習への志向性、あるいは観光自体の多様化や環境問題への関心の高まりなど、現代が内包する諸問題への取り組み策としても観光の機能が多様化し、教育観光の活用範囲が広がっている。

こうした教育観光の活用範囲の広がりを受け、近年、「旅育」という用語を耳にする機会も増えつつある。「旅育」とは、「旅を通じて未知の世界、未知の人びとと出会い、感受性を豊かにすることで、知見を広げ、豊かな生活を送ることができる人間となること」であるとされる⁵⁾。東條(2007)によれば、旅育とは「旅(旅行)の体験を通して健全な心身を養い、豊かな人間性を育むこと」であり、自らの意思で体験する場合と、施策として教育的に実施する場合とがある。平成20年度からは農林水産省、文部科学省、総務省の3省連携施策として「子ども農山漁村交流プロジェクト(ふるさと子ども夢学校)⁶⁾」という名前で「旅育」を推進する活動も始まっており、現在は主に低年齢層(小学生以下)を対象とした体験型学習等でこの用語が使用されることが多い。

東條（2007）は、「旅（旅行）をすることには、いろいろな目的・効用がある。その目的・効用の一つとして、旅育がある」と位置づけている。「旅（旅行）を体験することによって、見聞や視野を広げ、日本および世界の国々への興味・関心を持ち、理解をし、さらには、その土地の自然・文化・人間との出会いによって、自分に気づき、自分を成長させることができる。社会的マナー・常識・教養なども培うことができ、社会性を養うこともできる」（東條，2007）とし、旅育の効果が多岐にわたるものであることを示している。また、財団法人日本交通公社の岡田氏⁷⁾も、「「旅」を通して、感じる力、洞察力、思考力、地域を見る目、生きる楽しさ、生きる知恵が育まれるのです。旅育が、子供の「生きる力」を育むのです」とし、旅育力について指摘している。株式会社ジェイティービーは、国内パッケージツアーエースJTB「旅育！ たびいく」を2010年に発売した。ジェイティービー（2010）によれば「「旅育」とは、「旅の持つ力」により、学校や家とは違う環境で子どもたちの好奇心をはぐくみ、親子のコミュニケーションを通じて子どもの成長を手助けする取り組み」であるとしている。この商品は主として、幼児および小学生以下の子どもを持つ家族向けとされているが、本質的な旅の持つ力を考えれば、「旅育」の対象者は子供に限る必要性はないだろう。

4 国際協力教育（ICS）と旅育

4.1. 国際協力教育（ICS）と旅育力

「国際協力教育（International Cooperation Studies: 以下、ICS）」とは、以下の目的を達成するべく設定したものである。

- ・国際社会の共通問題についてその現状と原因を認識
- ・問題解決の取り組み手法とその仕組みを理解
- ・それらの問題がいかに自分たちの生活と関わりあっているかを理解
- ・問題解決のために国際社会がやらなければならないことを学習
- ・文化の多様性の中で一地球市民として自分ができることを学習

ICSは事前学習としての座学（国内授業）とその知識を進化・定着させるためのフィールド・スタディ（海外研修）から構成される。そこで実施される参加体験型学習プログラムは、体験を通して知識学習の理解を深化させるねらいと異文化間交流による人的理解という2つの効果を見込んでいる。ICSにおける参加体験学習とは、国際社会の共通問題の実態に接し、その問題解決の取り組み活動に参加体験することで、自分たちとの関わり、地球市民の役割などについて考え、国際協力の理解を深めるだけでなく、共同作業など人的交流を通して多文化共生の体験をする学習のことを意味する。教室という仮想空間ではなく国際協力が行われる現場での実体験を通じ、授業などで事前に「知識」として得た概念や理論の理解をより深める学習方法であるとし、参加体験を通して、教室ではなかった新たな「気づき」、参加者同士の「学び合い」、

確認のための「振り返り」により理解を確実にすることを学習のねらいとするものである。また、ICSでは、教室内シミュレーションではなく、現場を体験することにさらなる重要性を置いている⁸⁾。これは国際協力教育の学習のねらいや目標が「開発問題を(知識として)理解する」ことだけでなく、体得することが肝要であり、またそれらを構成する「人的交流による理解」をも求めるものだからである。したがって、学習プロセスにおいては、参加者の単体(個人)活動の成果だけでなく、人間相互の関係性の中で生じる事象に関して身をもって学びとることが重要となる。

ICS内で実施される諸活動は、結果的に、グローバル化の進む社会において、参加者が生きていく上で必要な多様な能力を身につけるきっかけを与え得るもの、という意図がある。つまり、旅の持つ効用としての「旅育力」を認識していると考えられる。

4.2. 大学での旅育の展開と可能性

昨今、多くの大学もしくは高等教育の場において留学や語学研修などといった海外での学びの機会が増えている。文部科学省の提示する学士力養成の観点からも、グローバルな社会におけるコミュニケーション能力の養成は必須であると捉えられており、世界で活躍できる優秀な人材育成という目的達成に向け、高等教育機関に対する期待も大きい。

寺本(2010)によれば、「空間的な移動経験や見知らぬ土地への興味関心を養うこと、多様な人々との触れ合いや別の土地の自然や歴史、伝統文化、芸能などとの接触は、視野の拡大と寛容な精神を育てることにつながる」とし、観光のもつ人間形成上の役割について指摘している。また、「大人に成長していく過程において、旅行や観光を積極的に行おうとする関心や意欲の醸成は、自分自身の人生を享受する能力ともなり得るため、余暇を積極的に生きていこうとするこれからの日本人にとって大切な資質の一つ」であると、生涯学習の観点からも「旅」の果たせる役割について言及している(寺本, 2010)。

では学生自身は旅に何を求めているのか。もちろん、「旅」にも多種多様な形態があり、一概にそこから得られるものを明示することは不可能である。したがって本稿では、大学での旅育という観点から「旅」を大学などの高等教育機関が催行する「教育旅行」に限定して考察・検証を行う。

まず「旅を通じて得たいと思うもの」について、文部科学省の提示する「学士力として獲得できるとされる能力項目」を用いて、学生38名を対象としたアンケート調査を行った。約2週間の海外研修旅行(教育旅行)に参加すると仮定し、その体験から得たいと思う能力についての質問に対し、最も獲得したいと思うものを希望順に3項目選び、その集計を行った。結果は以下の通りである(表1)。

表1. 大学生が考える「教育旅行」を通じた能力形成の希望度

能力項目	設問A) 獲得希望 者数	設問B) 最も獲得 したい項 目	設問C) 2番目に獲 得を希望 する項目	設問D) 3番目に獲 得を希望 する項目
多文化・異文化に関する知識の理解	27	9	11	4
人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	8	1	0	5
コミュニケーション・スキル	33	16	13	2
数量的スキル	1	0	0	0
情報リテラシー	2	0	1	1
論理的思考力	2	1	1	0
問題解決力	13	2	4	8
自己管理能力	14	2	3	9
チームワーク・リーダーシップ	2	0	1	1
倫理観	0	0	0	0
市民としての社会的責任	1	1	0	0
生涯学習力	5	2	0	4

※n=38

※ただし有効回答率は、設問Aについては97.36%、設問B・C・Dについては89.47%である。

(出所：アンケート結果をもとに筆者作成。)

まず、全体的に「多文化・異文化に関する知識の理解」「コミュニケーション・スキル」への関心は高く55.56%を示しており、次に「問題解決力」「自己管理能力」といった汎用的技能や態度・志向性に関する項目を回答するものは25%であった。そのうち、獲得を最も強く希望する項目では、73.5%が「多文化・異文化に関する知識の理解」「コミュニケーション・スキル」を挙げており、旅を通じて、こうした知識、能力獲得への期待度が高いことが明らかとなった。順位としてはこの2項目が圧倒的優位性を示しているが、第3希望項目の調査では、「問題解決力」「自己管理能力」も重要視されていることが明らかとなった。また、決して数は多くはないものの、将来的な学習能力の形成にもつながる「生涯学習力」を挙げる者も全体の4.6%ほどおり、第3希望項目に限定すると、その割合は11.76%を示している。これは旅を通じた学びのとりえ方が一過性のものだと考えない層があることを示しているとも解釈でき、今後の大学での旅育の実施を考える上でも、貴重な示唆を与える回答である。以上の結果から数値の多少はあるものの、少なくとも第1希望から第3希望項目までには「倫理観」を除くすべての項目が入っており、学生自身が大学で行う（可能性を有する）教育旅行に対して、相応の学習効果を期待していることが読み取れた。

以上、社会的要望や参加対象者である大学生の志向性などについて述べてきた。大学での旅

育の観点からすれば、単に教育観光としての意義だけではなくプログラムの内容に配慮することで、いわゆる「学士力」として求められる知識や能力を身につけさせることも可能となる。と同時に、大学生自身のニーズも反映することができる。杉山・二宮（2009）が示すように「客観的に「学士力」を評価することも重要ではあるが、大学生自身の主観的な自己評価も重要」であり、その意味において、こうした結果に基づいたプログラム策定も必要であると考えられる。つまり、ICSは工夫次第で大学の質および出口保証のための人材育成の機能も十分に盛り込むことが可能であると考えられる。

4.3. 実施プランの提示

では具体的にはどういった内容の研修旅行計画が考えられるのか。ここでは、登丸・秋山・中嶋（2011）の共同研究「国際協力教育における参加体験型学習プログラム構築の課題」で示した諸条件に基づき、4-2で示した内容をもとに、大学生が参加するプログラムの実施プラン（素案）を提示してみたい。なお、プラン提示にあたっては玉川大学文学部比較文化学科での実施ならびに実施対象国はフィリピン、と仮定して話を進めた⁹⁾。

ここでは国際協力の現場に身を置き、自らの体験をもって理解するというICSの目的に沿ってテーマ領域と盛り込むべき学習キーワードを選定した。また、現地での参加体験活動にはJICAのプロジェクトサイトの見学なども含まれることから、JICAの提示する国際協力の領域分類を参考に、以下の3領域の取り組みを扱うこととし、これらの内容を理解、体得できるような参加体験を組み込んだ形での実施プランの構築を試みた（表2）。

① 貧困削減と人間開発

- ・ 済開発：農業，工業，商業，金融，エネルギー，運輸，通信，科学技術
- ・ 社会開発：教育・人材，保健・医療，人権，雇用，年金
- ・ 行政・制度改革：行政機構，税制・法制，社会保障，安全保障，人間安全保障，食料安全保障

② 環境と持続可能な開発

- ・ 環境破壊と汚染：地球生態系（陸地生態系，海洋生態系），大気，土壌，水，生物，天然資源，気候変動
- ・ 持続可能性：有限資源，環境負荷，資源効率，生態系保全・再生，持続可能な開発の3原則（世代間の平等，現世代のニーズ，開発の限度）

③ 紛争予防と平和構築

- ・ 異文化理解，人道支援，民主化支援

実施プラン（素案）の編成にあたっては、問題の現状認識、問題解決の取り組み活動の確認、

「国際協力教育」と学士力養成

表2. フィリピン国際協力参加体験スタディ・ツアー（素案）

日程	内容		宿泊地
事前研修		国際協力概要, 参加体験学習, フィリピン国の概要とテーマ領域, 日程説明, パートナーとの協働, モデル・プロジェクトの概要, 健康と安全, 危機管理, 渡航準備とバックギング・リスト	
第1日	AM	出発 成田空港集合 (離陸2時間30分前), 搭乗手続き	マニラ
	PM	到着 マニラ空港, バスでマニラ市内ホテルへ移動, チェックイン, ミーティング	
第2日	AM	日本大使館表敬: フィリピンの国情と日本の対フィリピンODA	マニラ
		JICA事務所訪問: 対フィリピンODAと援助活動の現況	
	PM	パートナー紹介: パートナーの活動とフィリピン国の紹介レクチャー パートナーとの会食・パーティ (以後, 現地活動はパートナーと協働)	
第3日	AM	フィリピン政府機関表敬 (テーマ領域に関わる省庁レベル) 在フィリピン国際機関表敬 (UNDP, アジア開発銀行など)	マニラ
	PM	マニラ市内の視察	
第4日	AM	バスで移動, イフガオ州ラガウェ	バナウエ (ホテル)
	PM	夕食後ミーティング意見交換	
第5日	AM	母子保健プロジェクト事務所訪問, プロジェクト・ブリーフィング 州政府とプロジェクト地域の役場等訪問, プロジェクト地域の状況と活動視察	バナウエ (ホテル/ホームステイ)
	PM	コミュニティ型母子保健活動への参加体験 夕食は関係者, 地域住民を招待して交歓会食	
第6日	AM	世界遺産保護活動への参加体験 (世界遺産コルディリエーラの棚田群, バ	バナウエ (ホテル/ホームステイ)
	PM	ナウエ棚田補修活動)	
第7日	AM	集合してバス移動, マニラへ, ホテルチェックイン	マニラ
	PM	中間報告会 (意見交換・反省などの振り返り)	
第8日	AM	自由行動 (マニラ市内観光)	マニラ
	PM		
第9日	AM	バスで移動, サン・フェルナンド, ピナツポ火山災害復旧プロジェクト事務所訪問, プロジェクト・ブリーフィング, プロジェクト地域の行政 (役場) 訪問	サン・フェルナンド (ホテル/ホームステイ)
	PM	プロジェクト地域の被害状況と活動視察, 夕食後ミーティング意見交換	
第10日	AM	被災住民の参加型農村開発活動への参加体験 (1)	サン・フェルナンド (ホテル/ホームステイ)
	PM		
第11日	AM	被災住民の参加型農村開発活動への参加体験 (2)	サン・フェルナンド (ホテル)
	PM	ミーティング・意見交換と総括	
第12日	AM	集合してバス移動マニラへ, ホテルチェックイン	マニラ
	PM	コレヒドール島フェリー・ツアー, 夕食はパートナーとフェアウェル・パーティ	
第13日	AM	自由行動	マニラ
	PM		
第14日	AM	帰国 バス移動マニラ空港, 搭乗手続き (離陸2時間30分前), 成田空港着,	
	PM	解散	
帰国報告・総括	後日	日程に沿った活動の講評, 意見交換, プログラム評価アンケート, 終了レポート	

(出所: 筆者作成)

人が優先する末端の取り組み活動の確認、活動参加による取り組みの実感と貢献意識、共同作業を通じた問題の共有意識、人的交流と生活体験など、参加者が何かに気付き、学び合い、振り返るための環境ときっかけを与えるような構成に配慮することが不可欠であると考えられる。加えて、単なる現地体験のみを対象とする教育方法ではなく、より深い理解、知識の定着のために、事前授業としての（指定する）他科目の履修も必須とする、という位置づけでのプラン提示が必要である。（本学の文学部比較文化学科での実施を想定した場合には、国際交流や国際協力、他文化・異文化理解に関する科目の履修を課すことを、参加希望者の前提条件とする。）また、ICSを旅による教育手法（すなわち旅育の一種）として位置づけた場合には、旅の目的・効用にも考慮し、旅を通じて獲得される要素を活動内容に盛り込んだ実施プランを提示すべきであろう。

5 考察——実施プランの効果分析

では、実際にこうしたプランの実施は、学士力養成のどの能力項目に対し有効なのか。ICSの一つの特徴とも言える参加体験の中でも、援助プロジェクトへの「参加体験」を通じ、何が獲得できるのかについて以下に検証・考察を試みる。本稿で提示した援助プロジェクト参加体験の内容は「(A) コミュニティ型母子保健活動」「(B) 世界遺産保護活動（世界遺産コルディリェーラの棚田群、バナウエ棚田補修活動）」「(C) ピナツボ火山被災住民の参加型農村開発活動（1）」「(D) 同参加型農村開発活動（2）」の計4種類である。この4種類を通じ、先述の国際協力の3領域と関連する学習キーワードの理解・体得を目指した。

この4種類の活動には、参加にあたってのプロジェクト・ブリーフィングが含まれており、そこでは「多文化・異文化に関する知識の理解」「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」が目指される。それらの理解を促進するために必要となるのが、「情報リテラシー」であり、場合によっては「数量的スキル」である。また、すべての現地活動はパートナーとの協働を前提としているため、言語能力の有無に関係なく「コミュニケーション・スキル」が不可欠となり、援助プロジェクト参加体験等においてチーム（グループ）で活動するケースでは「チームワーク・リーダーシップ」も求められる。具体的な能力としては、以上のような項目の比重が大きいと考えられる。

他方、異文化圏内ならではの問題に直面することも考えられる。円滑なプログラムへの参加や各プロジェクト遂行のために、何が必要なのか、それをどのようにすれば入手可能となるのか、といった問題を自分で考え解決する必要性にも迫られる。そこでは「問題解決力」「論理的思考力」「自己管理力」といった力が有効である。結果的に、こうした体験全般を通じ、参加者自身の素養・資質として「倫理観」「市民としての社会的責任」が醸成される可能性が高まり、それが本人の「生涯学習力」へとつながることが想定できる。

こうした流れは、東條（2007）らをはじめ、第3章で示した旅の効用そのものである。東條

(2007)による「見聞や視野を広げる」「日本および世界の国々への興味・関心を持ち、理解する」「その土地の自然・文化・人間と出会う」「社会的マナー・常識・教養などを培う」「社会性を養う」といった機能は、上述の検証からもわかる通り、学士力の各項目にも類似あるいは重複する要素もある。例えば、学士力の「知識・理解」に含まれる各項目は、旅育の言うところの「見聞や視野を広げる」「日本および世界の国々への興味・関心を持ち、理解する」「その土地の自然・文化・人間と出会う」といったものが当てはまる。倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力といった「態度・志向性」には、「その土地の自然・文化・人間と出会う」「社会的マナー・常識・教養などを培う」「社会性を養う」といった機能が該当すると考えられる。また、自己管理力、チームワーク・リーダーシップといった個人の資質に関わる要素やいわゆる汎用的技能に含まれる能力（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）は、旅程を組み立て調整するプロセスおよび現場での体験を通じて、各参加者が獲得することになるだろう。

6 まとめ——ICSは学士力養成のツールとなりうるか

文部科学省の提示する学士力は、経済産業省の「社会人基礎力」、厚生労働省の「YES—プログラム」などといった就職基礎力をはかるものとも重複する要素が多くあるが、いずれの能力育成についても近年、その社会的な期待は高まる一方である。本研究では、昨今の高等教育への様々な期待感の高まりに対するより具体的な提言として、「国際協力教育（ICS）」の実施による学士力養成の可能性について、フィリピンでのプログラム実施を仮定し「旅育」の視点を用いて検討を行った。また、履修する学生がどのような能力を獲得したいと考えているのかについても合わせて調査し、検証を加えた。

学生の期待については、主に「多文化・異文化に関する知識の理解」、「コミュニケーション・スキル」への偏りが見られたが、その他の能力についても幅広くニーズがあることが調査結果から明らかとなり、海外研修旅行を実施する場合の成果に対する期待度の高さがうかがえた。ICSに限らず海外研修を促進する場合には、単に海外経験をすれば良いという安易な取り組み姿勢ではなく、学生自身が旅育力に対する理解を深めることが重要であり、「多文化・異文化に関する知識の理解」、「コミュニケーション・スキル」だけでなく、その他の能力形成にも有効であることをまず学生が自覚・認識する必要もある。そうすることで、旅の持つ力がより大きく発揮されることにつながると考えられる。また、実施プラン（素案）の提示とその検証によって、ICSの提示する条件設定に基づいた研修旅行計画には旅育力があると考えられ、具体的には、援助プロジェクトへの参加体験を主として、多様な能力・態度等が醸成される可能性があることを示すことができた。

以上から、リサーチ・クエスチョンとしての「ICSは学士力養成のツールとなりうるか」という問いに対しては、求められる知識や能力、あるいは態度などといった要素獲得の機会とし

て機能する可能性が高く、学士力養成の一つのツールとして、概ね効果を有すると結論付けた。大学の質保証、出口保証の観点からは言うまでもないが、昨今の就職状況を鑑みても、こうした参加体験型学習による能力形成は、例えば、先述の社会人基礎力などの養成にもつながるため、相互に有益に作用する可能性も考えられる。また学生の求める能力養成に応えることも一つの保証のあり方であろう。

現段階では、ICSの設置・参加体験プログラムの実施については可能性の検討段階にあり、教育効果評価におけるPDCAサイクル上の「Plan」の段階にとどまっているため、「Do」段階より先の検証と改善を行うところには至っていない。今後「Do」の段階に進むためには、そもそも実施プラン（素案）で示したような、多分野をカバーする広域型モデルが適切なのか、あるいは場所を限定し、長期間の作業参加を通して地域住民とも深く関わりながら生活や文化などの理解を深めるといった地域限定単一型モデルが適切なのかも検討する必要がある。加えて、運用にあたっては、ICSの設置や参加体験プログラムの実施時期の検討、事前学習として履修すべき他科目との連携、カリキュラム編成や認定単位数などについても検討を加えねばならない。将来的には他学部他学科などへの汎用性についても幅広く検討の余地は残っている。実施プランで提示した内容についてはあくまで素案であり、世界情勢の変化に応じた改変も適宜加える必要もある。実現化するにあたっては、関係省庁やパートナーとなる関係諸機関との調整も再度行わねばならない。

このように、実現にはまだまだ取り組むべき課題は山積している状況にある。まずは小規模なケース・スタディを積み重ねることも良質なプログラム構築のためには必要となるだろう。よって、現地でのフィージビリティ・スタディを含めた継続研究が不可欠であることを記し、本稿のまとめとしたい。

※なお、本稿は平成22年度共同研究「国際協力教育における参加体験型学習プログラム構築の課題」（『玉川大学学術研究所紀要』第17号）の成果の一部をもとに、筆者が継続研究を行った成果発表である。本稿の文責は本論文の執筆者に帰するが、既にご退官の共同研究者（登丸求己氏）との協働によるところが大きく、ここに感謝の意をこめて記すものとする。

注

- 1) 詳しくは別稿（共同研究「国際協力教育における参加体験型学習プログラム構築の課題」『玉川大学学術研究所紀要』第17号）を参照されたい。
- 2) 本研究では、便宜上、旅、旅行、観光といった用語についてはほぼ同義として取り扱う。
- 3) ここでは各項目の説明は割愛する。詳しくは、文部科学省中央教育審議会答申（2008年12月）を参照されたい。
- 4) 王侯貴族、およびその子弟が知識や見聞を深めるために行うもの。

- 5) Yahoo辞書「旅育(たびいく)」(亀井, 2008) <http://dic.yahoo.co.jp/newword?ref=1&p=%E6%97%85&index=2008000607> (2011年12月1日アクセス)
- 6) 全国の小学生が、農山漁村で長期の宿泊体験活動を行えるように支援する事業で、2013年までに全国の約2万3000校全ての公立小学校で実施する予定。
- 7) 岡田美奈子「子供の「生きる力」を育てる「旅育」」(研究員コラム vol. 109) (財)日本交通公社 HP http://www.jtb.or.jp/investigation/index.php?content_id=286 (2011年12月2日アクセス)
- 8) ESD等、類似教科との関係性については、別稿(脚注1に同じ)を参照されたい。
- 9) プログラム実施国の選定と妥当性については、i. テーマ領域の妥当性、政治・社会情勢などの安定性、ii. 健康・食事・治安など生活の安全性、iii. 旅費・生活費などの経済性、iv. その他: 言語(英語)、宗教、伝統文化、対日感情などを考慮した。その他、実施国選択の前提条件などの詳細は、別稿(脚注1に同じ)を参照されたい。条件設定にあたっては、すべて2010年8月に実施した現地調査データをもとにした。

参考文献

- 小川宣子・富士霸王・久世均・後藤忠彦「学士力養成にあたっての初年次教育の構築—カリキュラムと評価—」『岐阜女子大学紀要』第39号、岐阜女子大学、2009年、1-6頁
- 香川眞(編)『観光学大事典』木楽舎、2007年
- 川口隆一・伊藤昇・石坂和幸・細野由紀子「「学士力」を軸とする新たな「教育力」広報の構築——同志社大学との比較分析を通じて」『大学行政研究』第4号、立命館大学、2009年、125-137頁
- 川島太津夫「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」『名古屋高等教育研究』第8号、2008年、171-191頁
- 久世均・三宅茜巳・田中陽治・安井智恵・安藤久夫・吉澤龍二・山中マーガレット・今井弘昌・橋詰恵雄・吉永淑雄「学士力を保証する実践力ある学生の養成—専門教育力を基盤とする教育と評価の一体化—」『岐阜女子大学紀要』第39号、岐阜女子大学、2009年、7-15頁
- 杉山佳菜子・二宮克美「「学士力」自己評価と大学授業観との関連」『日本教育心理学会総会発表論文集』第51号、日本教育心理学会、2009年、268頁
- 寺本潔「小学校社会科における観光単元の導入に関する一考察」『論叢2010(玉川大学教育学部紀要)』玉川大学教育学部、2010年、27-42頁
- マーチン・トロウ『高学歴社会の大学——エリートからマスへ』東京大学出版会、1976年
- 矢藤誠慈郎・松村幸四郎「学士力を保証するための学生支援方策に関する研究(1)」『東邦学誌』第38巻第1号、愛知東邦大学、2009年、73-82頁
- 矢藤誠慈郎・松村幸四郎「学士力を保証するための学生支援方策に関する研究(2)」『東邦学誌』第38巻第1号、愛知東邦大学、2009年、109-114頁

(なかじま まみ)

The Possibilities of “International Cooperation Studies (ICS)” to Foster the Graduate Ability and Skills (*Gakushi-ryoku*)

—From the Perspective of Educational Function of Travel Called “*Tabiiku*” —

Mami NAKAJIMA

Abstract

The possibilities to foster graduate ability and skills called “*Gakushi-ryoku*” by International Cooperation Studies (ICS) were discussed in this study, from the perspective of “*Tabiiku*” as educational function of travel. There is a growing need for building “*Gakushi-ryoku*” through the subjects in university. In the case of regarding ICS as a way of overseas activities in higher education, it is conducted not only from societal need and demand but also from the high expectation by students themselves. Participation in ICS program, which means participation in travel activities, can bring abilities and attitudes presented in “*Gakushi-ryoku*.” Therefore, ICS works well to acquire “*Gakushi-ryoku*” as a kind of “*Tabiiku*.”

keywords : Graduate Ability and Skills (*Gakushi-ryoku*), Educational Function of Travel (*Tabiiku*), International Cooperation Studies (ICS)